

遠征隊の倫理観と国際交流について

大 貫 敏 史

海外の山に登りに行く、という行為は、当然他の国家、つまり政治的、経済的、文化的に異質の場所へ行き、しかもその果てにある自然の究極に挑むことに他ならない。これは、大きな意味での“国際交流”と呼べる。

ごく一般に“海外登山の評価”というと、それはスポーツの側面であり、具体的には、フィールド（ベースキャンプから山頂まで）をどう登ったか：タクティクス、スタイル、酸素使用の有無、ポーター使用の有無、などのことを指す。アルピニズムというものが、より困難なものを求め、その困難が、山岳およびそれをとりまく自然環境（気象；気候、季節、酸素濃度）と、登攀者をとりまく人為的環境（力量、人数、装備、補助者など）との相関関係から規定される以上、それ以外の要素が、評価・価値に入りようが無い。必要十分な要素であり、それだけで評価されるべきものである。

しかし、他の一般スポーツが、特定のフィールドで厳格に規定されたルールの下で行われ、フィールド内で自己完結しているのに比べ、海外登山はフィールド外要素が多く入る。登山隊を組織する以上、それがたとえ一人や二人だけで組織されるものであるにせよ、例外なく他国の人に何らかの作用を行い、自然に影響し、現地に多少の外貨をもたらすことになる。それはベースキャンプに着く以前から、違う意味で登山が始まることを意味している。

ここでは、もっと広義の視点で、評価すべき要素とは何か、海外で山に登ろうとする者が根本に捉えるべき考え方は何かについて、私の大変貧しい海外登山の経験を通して感じて来たことを述べてみたい。

1. 登攀外登山者としての倫理観

1988年のごとになるが、私は三国友好登山隊という珍しい登山隊に参加する機会を得た。テレビで大騒ぎしていたのでご記憶の方もいるであろう。あのチョモランマに、中国、ネパール、日本から集まった隊員が一同に会し、中国側、ネパール側各々から登攀し、交差縦走をしようという、鳴物入りの登山隊のことだ。峽義の“登山の評価”からは何ボのものか、見当はつかなかったが、私はそんな記録の意義よりも、体制、人種、文化のまったく違う隊員達の立居振舞いを観察し、交流することの方が、はるかに面白く興味深いものであった。

一口に言えば、日本人は非常に“対社会的”であった。ネパール人は、さすがに多民族国家らしく、異文化に対する柔軟性が高い。中国人は、マジョリティーの漢民族対少数民族の織りなす図式に、イデオロギーが重くのしかかっているといった感じであった。

最近、よく諸外国から「日本人は傲慢だ。」といった声が聞かれるが、私は、日本人登山家の中の

2. 海外登山の実践と今後の課題

“村社会”の中に、日本人一般が、潜在的に持つ、傲慢さの縮図を見る思いがした。派閥を作って群れたがる。更に陰で他人の批評をすることは好きだが、直接交渉は避けようとする。これは、特に異質なものを、他国籍の人間に対して顕著である。これの裏返しで、観念的に対極にある物事を規定しようという傾向が強く、偏見を助長し易い。

「ネパール人はこうだから。」「中国人とはつきあえん。」など。日本国内でも、すぐ○△族、新人類と分類、定義づけし、自分のコミュニケーション能力・努力の不足を、相手を異質なものを、特殊なもの、と決めつけることで、覆い隠そうとするあの傾向である。

私自身、日本人であるが由、身につけてしまった行動規範を持ちながらも、オープンで友好的なネパール人隊員や軍人、中国人の通訳達との長い交流を経て、多くの日本人が持っている変な（本当に奇妙に感じるようになった）習性に敏感になった。

この習性と、日本が戦後復興の中で身につけてきてしまった欧米崇拜とアジア諸国に対する優越観念が混ざって、日本人の多くがアジア地域にやって来たときの、現地の人に対する態度に如実に現れる。

その日本人が、これまた大英帝国の植民地政策の延長として行われた大登山隊の“現地人を使って山へ登る”という様式をそのまま踏襲してきたとなれば、おのずと日本人の現地の人に対する態度がどうであるか、分かるというものだ。

カトマンズのある場所で、こんなことを目撃した。あるタクシーの中で、日本人のクライマーがなんとドライバーの肩をバンバン叩きネパール語で怒鳴り散らしているのだ。別にドライバーに何の不手際があった訳でもない。彼は、豊富な遠征経験を持つ“一流”クライマーなのに、彼の態度には

『現地人など怒鳴り驚かし使えばいいんだ。』という意識がありありと現れていた。今でも、そのタクシードライバーの不安と困惑に満ちた表情を忘れることが出来ない。

私達は、このことを忘れていないだろうか。私達が海外登山を行うということは、“我々が、全く勝手に現地人の生活圏に入り、人様の裏山へ勝手に登るといこと”なのだ。どう見たところで、これには“謙虚さ”こそ必要不可欠であれ、“傲慢さ”の入り込む余地がない。しかも“人様の裏山へ登る”以上、一つのゴミも残さないのが、道理というものではないか。東京の高尾山に外国人が押しかけ、誠実に勤めあげるJR高尾駅職員や土産物屋のオバサンに傍若無人な態度で望み、ゴミを登山道にまき散らして帰ったら、きっと八王子市民は怒り、外人入山排せき運動を始めるだろう。またこの外人みたいな行為をする日本人はいないはずだ。同じことがどうして外国でできるのだろうか。

私達はあくまで“お邪魔して”そして“登らせていただく”立場なのだ。果たして我々はこんな簡単な倫理観を、深く認識して登っているだろうか。

2. 海外登山の実践と今後の課題

2. 人—雇用関係と積極的交流

(1) ポーターとの関係

ポーターやシェルパなど我々を助けてくれる人々、彼らに我々はもっと敬意を払うべきだと思う。彼らと我々の関係は、あくまで契約関係。労働力を提供してもらって、その見返りに賃金を支払う。最近では各国ともレギュレーションがしっかりしており、トラブルは少なくなったようだ。しかし、それでも楽に沢山の賃金をもらいたいと思うのは、普遍的労働者の心理である。日本では、労使間の主張が食い違った時、あくまでも話し合いで決めていく。万一にも雇用主が怒鳴って、いかくして労働を強いることなんてあり得ない。そんなことをしたら、それこそ社会的な大問題だ。こんなあたり前のことを守れない日本人が、稀にいるらしい。日本での社会的地位の低さに対する腹いせのつもりなのだろうか。

(2) 意識の変革と地元山岳会との交流

ネパールに行った時のこと。シェルパ族であり登山学校講師であるアン・カルマ氏がつぶやいた。

「ネパール人は、もう独自でエベレストでも何でも登れる力がある、ただ貧乏なだけだ。日本がうらやましい。」

彼は、多くの欧米登山隊に同行し、多くの高峰のサミッターとなり、日頃はBBC放送を聴守し情報を収集し、欧米人の中に積極的に入って行って意見の交換を行なう。語学力に乏しく、閉鎖的な日本人には取り合わない。長い間、先進のクライマーの思想と登山スタイルの影響を受け、限らない上昇意識を持つ新しいタイプのクライマーである。エベレスト無酸素登頂を5回も果した、アン・リタ氏のように「生活の為に山に登るんじゃ！」という旧来の日雇い割り切りの意識構造型が存在する反面、アン・カルマのような若い世代のやる気のあるクライマーがいる。彼らは何らかの形で地元の山岳会に関わりを持つ（ネパール山岳協会やパキスタン山岳会など）。彼らの多くは、登山先進国（金余り国）の援助を持っている。

我々は、登山許可取得への有効性からこうした地元山岳会の人間との合同登山を申し入れるが、これはもっと積極的な意味で、登山を非常に豊に思う。これはポーターを雇用する時の人間関係とは違う、“対等”の立場に立った“国際交流”であるからだ。登山方法、思想が違う者同志がぶつかりあう。まさに直接交渉をせずしては何も進まない。ケンカしてとことん話しあって理解し合える。こんな貴重な体験はそう多くない。“対等”であるが由、初めて分かる違いもあろう。意識の高い現地の人にチャンスを作り、我々も多くのものを受ける。“国際貢献”の一種に違いない。

単にどこそこの壁を登り、どう山頂に立った。そのみしか興味のない登山者には関係ない。しかし、海外登山がその規模由、少なからず与えてしまう社会的影響を認識し、そんれを逆に“豊かな登山”の一要素に組み込んでも良いと考えるなら、我々の、途上国に比べれば圧倒的に豊かな経

済力を、登山の付加価値に向けても良いのではないだろうか。特に若い世代のクライマーにとって、この種の体験が素晴らしい影響を与えるのは、体験的に理解出来る。“国際人”を育てる良い機会だ。

3. 自然-ゴミ処理と“下山のタクティクス”

(1) ゴミ処理

“人様の裏山”へ“お邪魔”しているのだから、ゴミは極力出さない。出たら持ち帰る。もう倫理観があれば“地球環境の破壊”などと大げさな大義名文を持ち出さなくても、当然実施する事柄である。

しかし、一体どれだけの登山隊が、はっきりと準備段階から『ゴミ処理計画』を積極的に盛り込んでいるのであろうか。もう環境問題は一部活動家の対象ではなく、一般市民、企業そして登山者も含めた緊急課題となった。先進の一流登山者のあいだで提唱されたヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト(H. A. T.)も、この時代の趨勢を受けたもので、もはやクライマーは登りっぱなしでは許されないという時節なのだ。当面、海外で登ろうとする者は、このH. A. T.のテイクアウトの原則を守り、確実に準備計画に『ゴミ処理計画』を盛り込むこと。更に、いかに『ゴミ処理計画』が確実に行われたか、で登山の“記録”ではなく“質”に対する評価が成されるべきであらう。

(2) 『下山のタクティクス』

『下山のタクティクス』とは、ロープ、テント、ゴミ等を如何に完全にベースキャンプに集結するか、という方法論のことである。

“登攀のタクティクス”は、それこそあらゆる雑誌で熱心に討議されても、下山については語られることはない。登ってしまえば、もうあとは一気に逃げ帰るだけ、と考えてはいないだろうか。下山時の状況が、命に関わるなら仕方がない。しかし、“自分がやって来たときのままの状態に戻して帰る”という当たり前の原則が希薄すぎる為、気を抜いたまま下山し、沢山のを山中に置き去りにしていないだろうか。必ず全ての物を回収できる人員と日数を行動表上に盛り込み、装備面では、“回収し易いプロテクション”の採用や考察を行うべきである。単に登頂への有効性のみで『下山のタクティクス』を慮みることの無かったツケが、サウスコルの酸素ボンベの残骸やジュネバ・スパーのロープの束となって残っている。私が隊長として、パキスタンのトリボール峰に登山した時も、『下山のタクティクス』の不備由、ゴミ処理計画が半端に終わってしまった。大反省している。

4. ま と め

あらゆる日本の特殊性・閉鎖性が、諸外国の集中砲火的になっている。外国で生活する少数の日本人(商社マンなど)のちょっとした態度が、日本に対する現地の意識を硬化する。登山者のように、多くの現地の人と関わりを持つ人間の態度も、非常に重要である。最低限、人間として当り前の

2. 海外登山の実践と今後の課題

倫理観を持つことは、登頂を果たすこと以上に重要なことなのだ。

更に、“国際貢献”とは、政府が大上段に構えてやることだけではない。実際に外国に行って、何らかの活動を行う個人こそが、いつも心に留めておくべき事柄なのだ。そういった意味で、登山隊は、集金目的以外に、直接現地に対する寄附、寄贈、医療活動など積極的に取り入れて行くのは、意義深い。もう登山自体にも、NGO的草の根貢献の心が必要だ。

何とんでも“お邪魔して”そして“登らせていただいた”のだから、地元は何らかの“お礼”をするというのが、当り前の礼儀、普通の思考というものではないだろうか。

補促 拙文を書き終えて数日後、エドモンド・ヒラリー郷の「エベレスト入山五年間禁止」提案が出た。優先課題は、登山者個人のエゴに勝るという良識を感じた。(早稲田大学山岳部OB)